

親会社の破綻乗り越えた 縫製会社「HITOYOSHI」

白いシャツで世界と勝負

親会社の経営破綻を乗り越え、「メイドイン人吉」で全国へ世界へと展開を図る高級シャツ縫製会社がある。その名も「HITOYOSHI」。

大手「ミヤパレル(東京)」の出先工場だったが、同社の経営破綻後、1年ほど前に役員や工場長らが地元雇用を守って再出発した。前年比の売り上げが2年続けて8割増という快進撃を見込む。

人吉市の丘陵地。一自信はあったが、わずか1年でここまでいけるなんて。メイドインジャパン、メイドイン人吉の高い技術を信じてこたわったからこそだ。親会社の取締役から新会社トップに転身した吉國武社長(54)は、ミシンがフル稼働する工房を見つめて感慨深げだ。

工場の稼働は1999年。手作業で袖付けや首回り仕上げなどを施し、百貨店に出店するアパレルメーカーと取引してきた。しかし、カジュアル部門を含め手広く展開していた親会社は、長引く不況による受注減で2009年2月に会社更生法の適用を申請した。

先が見えない中、「人吉工場」で手掛けてきた高級シャツには可能性が残っている。培った技術や精神を、DNAのよつに次の世代に引き継ごう」と、吉國社長と竹長一幸工場長(43)が決断。投資会社と計約4500万円を出資し、新会社で事業を引き継いだ。



多数のミシンが並ぶ、シャツ縫製会社HITOYOSHIの工房内。吉國武社長(右から2人目)と竹長一幸工場長(同3人目)

縫製技術への評価は高く、百貨店などからの受注が順調に増加。新会社設立当初74人

だった従業員は、1年で100人に増えた。「経営破綻で不安だったの

が、ずっと昔のよう。職場は明るく、製品への責任感も増した」と、縫製を20年担当し

ている前田幸世さん(49)「相良村。竹長工場長は「残業の日々ですが、仕事がある喜びの方が大きい」とうれしい悲鳴を上げる。

こだわりは白いシャツ。新会社設立とともに東京・南青山にオフィスを構えたが、ピルの内外装とも白だ。「縫い目が自立するため、まかしが効かず、高い技術が必要。当社のものでづくりの技術と精神は白シャツに凝縮している」と竹長工場長。

今年には自社ブランドの確立と世界展開を視野に入れる。「HITOYOSHIのブランド名で世界で勝負したい。もはや夢ではなく目標です」。吉國社長は力を込める。

(上田良志)